

はじめに

私は1989年に生まれました。
私の生年月日を1+9+8+9+…のように、一の位に分解して足していくと合計が33になります。ですので、なんとなく、私は33という数字が好きでした。
1989年から始まった本展覧会のシリーズは今年で33回目を迎えるそうです。

そして、私は今年33歳で出産を迎え、1人の命を産み出しました。
このような時期にこのような機会をいただけた偶然は、なにか世界の秘密に触れてしまうようなことではないだろうか、と夢想することに決めました。
ふと、「眼球と子宮は繋がっている」と出産の本に書いてあるのが目に止まりました。
そこで私は、視覚とは、眼球とはなにか、生きて死ぬこと、人間とはなにかについて知りたくなりました。
この場所は、その答えが明確に示されているものではありません。私の思考の痕跡の集積自身が、私の無意識にふれ、結果的に、自ずと何らかの象徴を形造ってしまったのだと思います。
正直に話すなら、近年、自分の意思で作品を作っているという感覚が私にはありません。変わらず、世界の秘密に問いかけるような手つきで制作に向き合いました。

この展覧会のタイトルは『眼と球』、めときゅう、Me and Q、私と問い、です。
まるで最初からすべてが決まっていたみたいに、この展覧会は開幕するようです。
皆さまの感覚で、触って、歩いて、それぞれの意味を紡いでいただけると幸いです。

遠藤薫

「創造は、重力の下降運動、恩寵の上昇運動、それに二乗された恩寵の下降運動から成る」

(シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』)

インスタレーション『眼と球』の主たる作品は、麻布の落下傘(パラシュート)『Canvas/1945/ Hyogo Japan』です。

私は、落下傘が象徴する「落下・上昇・命を救う道具・殺める道具」というイメージから、ものごとの裏と表、正と負の両面が二つで一つであること、すなわち「不二」をテーマに、工藝にまつわる作品制作を続けています。
今回、私は兵庫県に滞在し、神戸港と海外への輸出入時に使用されたジュート麻袋に出会います。人や文化が変わるところに生まれる破壊と創造。そして、生と死は表裏一体であり、地続きに存在しているのではないか。そのような考えから、麻布の落下傘の「キャンバス」は制作されました。
「キャンバス」と呼ばれるリネン麻布は、15世紀ヴェネチアの船の帆であり、それらを転用して制作された画布でもあります。ジュート麻袋は、時に戦地では陣地に積み上げられた土嚢袋になりましたが、一方、戦時中の物資が不足したころには、画布にジュート麻袋が代用されました。

現在も、輸出入に使用された麻袋は、最終的に植物を育てることに再利用され、ひっそりと土に還っています。そして、かつて日本のある地域にて、麻布はその土への返りやすさのために死装束として自ら織り、着装し、土葬されていました。それらの歴史的事実が

私の中で円環を描き、循環し始めたように思えたのです。

この「キャンバス」は落下傘であり、かつての船の帆であり、画布であると同時に、眼球と子宮の形を模したものになりました。眼と子宮の繋がりについては古くから東洋医学や民間で囁かれており、西洋医学でも眼と子宮に必要な栄養素の類似性があることが指摘され、また実際に眼の角膜の手術には子宮の卵膜が使用されています。

眼とは、カンブリア期の生命爆発のころ、地球上に初めて誕生しました。眼を持ったアノマロカリスは最強の捕食者となりました。眼は唯一突出した粘膜を持つ器官です。視覚とは、元来は“食”＝“生命を殺めて自己の生を延命するための能力”です。一方、子宮は新しい命を育む場所です。これらは相反するようできて、どこか親和性があるようです。殺戮とそれによる生命維持と、子孫の繁栄。眼球と子宮は、まるで人間の動物的側面を象徴するような器官ではないでしょうか。

この落下傘は、あらゆる歴史背景を飲み込んで、人間の視覚そのものを象徴する布へと自ずから成っていったのだと思います。

なお、画布の下地は土や絵の具の元素、肥料などの“人間と同じ成分”を含んでおり、土に還る布として使用します。

作品『Canvas/ 1945/ Hyogo Japan』の覚書

制作 2023年

材料 役目を終えた神戸港輸出入用の麻袋・キャンバス乳濁液下地（卵、海水、鹿の膠、丹波粘土、亜麻仁油、肥料用炭酸カルシウム、戦時中に唯一国産絵の具を制作していた会社・月光荘の絵の具）

制作 2023年

材料 役目を終えた神戸港輸出入用の麻袋・キャンバス乳濁液下地（卵、海水、鹿の膠、丹波粘土、亜麻仁油、肥料用炭酸カルシウム、戦時中に唯一国産絵の具を制作していた会社・月光荘の絵の具）

制作 2023年

材料 役目を終えた神戸港輸出入用の麻袋・キャンバス乳濁液下地（卵、海水、鹿の膠、丹波粘土、亜麻仁油、肥料用炭酸カルシウム、戦時中に唯一国産絵の具を制作していた会社・月光荘の絵の具）

制作 2023年

材料 役目を終えた神戸港輸出入用の麻袋・キャンバス乳濁液下地（卵、海水、鹿の膠、丹波粘土、亜麻仁油、肥料用炭酸カルシウム、戦時中に唯一国産絵の具を制作していた会社・月光荘の絵の具）

周囲に配置するもの

ジュートの麻袋がキャンバスになる過程

ヴェネチア派の乳濁液下地（硫酸カルシウム）を採用。ヴェネチア派が船の帆を画布に用いたことが、それまでの板絵よりも絵画が巨大化した要因の一つとなる。

キャンバス

ヴェネチアのゴブラン織を用いたキャンバス

青森

青森の色褪せて白くなった麻の着物

かつて土葬が残っていたころは、自ら麻の死装束を織って、土葬された地域がある。

名画の刺繍の裏

青森の亡くなったおばあさまの縫われた作品。その作品の裏面に、膨大な仕事の跡が残る。ゴッホ「ひまわり」 ミレー「落穂拾い」 スーラ「グランド・ジャッド島の日曜日の午後」 東洲斎写楽「富嶽三十六景・神奈川沖浪裏」「凱風快晴」その他、作者不明のダヴィンチ「モナ・リザ」

キャンバス化した日本丸木造模型

第二次世界大戦が激化した1943年には帆装が取り外され、船体も目立たないように黒に塗装され、エンジンのみで航海し、瀬戸内海で石炭輸送などを行う。（帆は古くなると他の道具に転用されるので残らない）戦後は海外在留邦人の復員船として、2万5000人以上の引揚者を中国・上海や韓国・釜山、シンガポール、台湾などから輸送し、外地での遺骨収集にも携わる。朝鮮戦争の再開時にはGHQの指示により米兵や韓国兵などの輸送に務めた。神戸港にその姿を確認することができる。

人間の元素

人間の元素（海水や土、絵の具等）、鹿の骨、鹿膠や肥料などを、キャンバス下地の材料に

神戸港の海水や丹波・立杭の土や肥料のほか、月光荘のセレン・カドミウムレッド、コバルトブルー、クロム系絵の具を混ぜ合わせる。さらに、チタンホワイト、銅、モリブデン・オレンジなどを配合した。これらは、人体を構成する必須元素である。

『18世紀、BさんとCさんの結婚、BC、紀元前』

18世紀、結婚式の際のリネンのナブキン、植物染料、経血など。（リネンはヨーロッパで用いられる麻の一種。船の帆または画布＝キャンバスであった）紀元前を意味する「BC」と、ウィリアム・ブレイク“天国と地獄の結婚”＝“不二（二つにあらず、すなわち二つで一つ）”を象徴する。

兵庫

兵庫県丹波で焼いた陶器

丹波の土とパン生地のお菓を用いた。「土は人間である」とキリスト教の教義にはあるが、実際に土と人間の元素は非常に近いようだ。また、パンはキリストの肉の象徴として、今日でも礼拝で用いられる。

レーウエン・フックの顕微鏡

オランダにて織物商を営んでいたレーウエン・フックは、ガラス玉を用いた器具によって、商品の繊維を拡大し観察していた。ある日、彼はその器具によって、精子を発見する。動く精子を目の当たりし、生命の秘密に触れたフック。ホムンクルス（小さな人・人造人間）の夢想は、この発見から始まる。